

「自分の問題として捉える」ことの意義

—私にとって総合活動型日本語教育とは—

山本 玲

【キーワード】「自分の問題として捉える」・インターアクション・思考の明確化
・自己の思考プロセス

1. はじめに

私は大学時代に国際関係学を専攻しており、そこで歴史学を学んでいた。そして、過去の歴史問題に端を発する国家間同士の対立関係が、そのまま個人レベルでの対立関係をも生み出してしまうことに対して、強い疑問と矛盾を感じた。

過去の歴史問題に根ざした国家間同士の対立や摩擦が硬直化してしまう原因は、国内・国際政治上の理由が数多く挙げられるだろう。しかし、個人レベルの対立で考えるならば、過去の歴史に根ざした「国家」と「国家」としての対立関係が事実として実体化され、それが個人の認識としての対立感情へと移行し、個人の認識の枠組みが固定化されてしまったからではないだろうか。

しかし、集団間での固定化した対立が個人レベルでの対立となってしまうことに対して、抵抗を模索することは許されないのだろうか。集団間での対立が固定化されたとしても、そこに存在するのは個人である。認識し思考する個人の立場を互いに伝え合い、互いの差異を認めたいうえで、そこから新たな解決の方法を探るためのインターアクションを起こすことはできないのだろうか。

インターアクションとは、ことばによる自己と他者との関係付けである。自分の考えていることを明確にし、それを相手に表現し、それに対する相手の反応を受け止め、相手の言わんとすることは何なのかと想像力を働かせ、自己の思考とそれとを突き合わせ、吟味と批判的検証を重ねた後に、自己の思考に対して創造的修正を加え、再びそれを相手に表現する、ということの繰り返しである。一方で、この一連のプロセスにおいて、人は他者から様々な知識や情報を得たり、今まで考えたことのないことを考えさせられたりすることによって、それらを既存の知識・情報や認識枠組みと統合させ、そこで新たな意味関係を創出させながら、自分の考えていることを明確にしていく。

つまり、自分の考えていることが明確でなければインターアクションは成立しないし、インターアクションを取らなければ自分の考えていることは明確にならないのである。

以上のような問題関心に基づいて、本稿では総合活動型日本語教育をインターアクションを通して自分の考えていることを明確にしていく場である、という視点から捉えていこうと考える。具体的には、ある学習者の活動プロセスに焦点を当て、インターアクションを通じてどのように自分の考えていることを明確にしていたのか、そして、自分の考えていることが明確になるとはどういうことなのか、ということについて考察していくこととする。

2. 「自分の問題として捉える」プロセス

2. 1. 分析の方法と視点

本稿では、2005年春学期「総合3-6」(早稲田大学日本語教育センター:設計 細川英雄)を通して提出された学生のレポートと、授業記録、およびBBS上のやり取りを資料として縦断的に分析をする。なお、筆者はこのクラスに実習生として参加している。

この活動を行っていく上で重要になるのが、「自分の問題として捉える」という概念である。実際の活動に即して言うと、学習者は自分でテーマ「○○」を選び、そのテーマに対して自分はどのような価値の置き方「××」をするのか、ということ「私にとって○○は××である」という文にして表すことを求められる。本稿では、この「自分の問題として捉える」という概念を、「ある対象を捉える際の自己の視点を認識し、そのように捉える自己の思考プロセスを把握し、言語化することである」と定義し、この部分が明示的に述べられたときに、「自己の思考が明確になった」ものとして定位する。また、この場合の「自己の思考」とは、ある事柄に対して自分はどのような価値の置き方をするのか、という概念を含むものであることから、「個人のものの見方・考え方」と同等の意味を持つものとして本稿では使用する。

分析の対象とするのは「家庭主婦について」というタイトルでレポートを完成させたTである。彼女は活動の初期の段階で、テーマである家庭主婦についての主張を打ち出すことが既にできていたのだが、その主張を情報や他者の言説によって理由づけていたために、なかなか相手に自分の主張が伝わらなかった。しかし、授業内での他者とのインターアクションを通じて徐々に「自分の問題として捉える」ことができるようになった。よって、Tの活動を分析することで、自己の思考を明確にしていくプロセスを明らかにし、自己の思考を明確にすることの意義について考察できると考え、分析の対象とした。また、分析対象とするレポートは「動機文」執筆までとする。

2. 2. テーマ設定～自分の主張：自己の視点を認識する

Tはレポートのテーマとして、家庭主婦を選択した。これは、T自身が息子を持つ家庭主婦であることから、Tにとっては切実なテーマであると考えられる。

Tが最初に提出したレポートでは、家庭主婦の対処する生活は複雑であり、色々な工夫と知恵が必要である、だから家庭主婦は尊敬に値するのだと述べられていた。以下は、Tの主張とその主張を裏付ける根拠が書かれた部分を抜粋したものである。

(省略)しかし、家庭主婦は本当に能力のない、見下されるべき人であるか？私の答えは「NO」である。なぜなら、生活そのものは非常に複雑なもので、家庭主婦が対処するのはあくまでこの複雑な生活である。ある技術において優れた才能を持っていても、生活面においてかえてめちゃくちゃになる人は少ない少なくない。合格的な家庭主婦になるためには、色々な工夫と知恵が必要で、勉強しなければならないことも一杯ある。だから、自分の家庭をうまく経営できる家庭主婦は必ず会社をうまく管理する能力を持つと信じている。

私にとって、家庭主婦とはもっとも尊敬に値する偉大な生涯の職業で、優れた家庭主婦は必ず抜きん出た能力を持つことである。

(4月25日 BBS提出レポート)

一見すると、Tの捉える家庭主婦像が、具体的にとは言えないまでも、しっかりとした論調で述べられているし、そこから、だからこそ家庭主婦とは尊敬に値するのだというT自身の主張を述べており、論理の展開も明快である。しかし、よく読んでみるとこの文章では、Tが家庭主婦をそのように捉えるようになったプロセスが抜け落ちていることがわかるだろう。すなわち、主張とその主張を裏付ける根拠はあるのだが、そのように考えるようになったTの思考プロセスが書かれていないのである。これは、この動機文が提出された際のBBS上のやり取りからも明らかである。

T:「私の動機文、ぜひ意見を寄せてもらいたい」(2005/04/25 11:15:19)

おはよう！日本の家庭主婦は世界でも名高い。優しいし、きれいで、そして能力もある。私の感じでは、家庭主婦とは日本で誇りに値する職業のひとつだといえます。しかし、中国では、家庭主婦に対する評価はそんなに高くないと思います。だから、私は「家庭主婦」について、書きたいです。(以下省略)

K:「こんにちは！」(2005/04/25 15:31:50)

(省略)ところで、Tさんはなぜ主婦について書きたいと思ったんでしょうか？先週細川先生がおっしゃった「自分の問題として」というのがわかればいいんじゃないかなあとと思いますが、どうでしょうか？

T:「こんにちは」(2005/04/26 14:17:42)

(省略)もともとは家庭科の教科書について書きたいですが、考えに考えた末、やはり、家庭主婦について書きたい。なぜかという、現代社会では、家庭主婦に対する低い評価について、自分の不満を表すとかが家庭主婦のために名を正したいような気持ちがあるからです。

上記のやり取りには、Tがテーマである家庭主婦について書きたいと思うようになった理由が書かれている。ここではTは、中国での家庭主婦の評価は低い、自分はそうは思わないし、この文章を書くことで家庭主婦のために名を正したい、だから家庭主婦についての文章を書くのだ、と述べている。しかし、このことと、家庭主婦が尊敬に値するのだという主張との繋がりは曖昧である。この部分からも、Tが家庭主婦は尊敬に値するのだという主張に至ったプロセスを見ることはできない。

「自分の問題として捉える」ということは、自分と対象との関係をことばにすることである。つまり、ある対象を捉える際の自己の視点を認識し、同時にそのように捉える自己のものの見方・考え方を把握するということである。Tの場合で言えば、家庭主婦という対象を捉える際の視点を「尊敬に値するものだ」と認識し、同時にそのように捉える自己のものの見方・考え方、すなわち、「なぜ家庭主婦は尊敬に値するのか」という、Tの捉える家庭主婦像に映し出されるT自身の思考プロセスを把握し、言語化しなければいけないのである。

「総合」の活動では、この「自分の問題として捉える」ということが、「わたしにとって」あるいは、「なぜ」ということばによって幾度となく学習者に問われることになる。この「わたしにとって」あるいは「なぜ」ということばは、一人一人のものの見方・考え方の本質に迫る問いである。それは、単に「中国で言われているから」とか「現代社会では多くの人がこう思っているから」ということばでは済まされない。確かにそれもT自身の考えていることである。しかし、そこにはTがどのように対象を捉えているのかという、T個人のものの見方・考え方が映し出されていないのである。「総合」では、Tが対象である家庭主婦をどのように捉えるのかということを引き出そうと、「わたしにとって」と「なぜ」というキーワードで問いかけるのである。

2. 3. 主張だけでは伝わらない

「専業主婦になりたいのか」と聞かれると、おそらくほとんどの人は「なりたくない」と答えるのだろう。なぜなら、世の中では家庭主婦に対する評価は決して高くないからである。家庭主婦というと、能力と家庭内での経済地位と発言権がなく、他人に頼らねばならないとか、社会から残されて見込みがないなどのマイナスのイメージは考えられる。家庭主婦自身も常に引け目を感じ、自暴自棄でたまらない女性さえいる。

しかし、家庭主婦は果たして能力のない、見下されるべき人か？私の答えは「NO」である。なぜなら、生活は大変複雑なもので、家庭主婦が対処するのはあくまでこの複雑な生活そのものである。介格的な家庭主婦になるためには、必ず色々な工夫と知恵が必要で、勉強せねばならないことも一杯ある。これは決して容易なことではない。能力のある人でないと、自由自在に対処できないだろう。ある技術

において優れた才能を持つが、生活面においては却ってめちやくちやになる人はよく見られる。だから、自分の家庭をうまく経営できる家庭主婦は必ず高い能力を持つと信じている。

科学技術の進歩に従って、家庭主婦が家事の重労働から解放されつつあり、自由に使える時間は次第に多くなって。ボランティアとして社会生活に参加する、自分の趣味に打ち込むなど、自分がやりたいことを思う存分にやることができる。家庭主婦と同時に、作家、料理家、園芸家、社会活動家などとして活躍する女性は少なくない。肝心なのは、家庭主婦が生活に対し、いかな態度をとるかのことである。積極的に対応するのは、自分の人生は必ず精彩を放っている。これに反して、消極的に対応するのは、自分の人生は必ず見込みのないものになってしまう。

村上春樹はかつてこう書いている。「世の中の男性は一生のうちでせめて半年か一年くらい主夫をやってみるべきではないかという気がする。そうすれば現在社会でまかり通っている通念の多くのものがいかに不確実な基盤の上に成立しているかというのがよく分かるはずである。」まったく同感である。私にとって、家庭主婦とは尊敬に値する偉大な生涯の職業で、積極的で、優れた家庭主婦は必ず抜きんでの能力を持って、精彩的な人生を過ごすことができる。

(5月9日 BBS 提出レポート)

第二回目に提出された T の動機文を見てみると、文章の構成には前回のものと多少の変更はあるが、大枠としての主張は変わっていない。すなわち、家庭主婦の対処する生活は複雑であり、このような複雑な生活に対処することができる家庭主婦は尊敬に値する、さらに優れた家庭主婦は精彩的な人生を過ごすことができる、ということである。今回の動機文でも、T がそのように家庭主婦を捉えるようになったプロセスは書かれていない。そして、この動機文をめぐって、授業内で以下のようなやり取りが交わされる。

T: 中国では、家庭主婦はあまり評価されません。でも、家庭主婦はたくさんの家事をこなさなければなりません。繊細な感性をつかって料理もしなければいけません。

O: 主張はものすごくわかる。でもね、Tさんのそう考えるようになった、経験や理由がわからない。

T: …。わたしは、料理がなかなかうまくできずに苦労しています。それで…家庭主婦はとても能力がいるのだと感じています。女性は感覚が繊細です。ですから、家庭主婦はとても大切です。

A: でもねえ。ちょっといい？僕は男だけど料理するよ。全部しなくちゃいけない。どうして？家庭では男がなにもしない？それはおかしい。

T: …

O: じゃあ、Tさんにとって家庭主婦ってなに？

T: わたしにとって家庭主婦は…

O: …。う～ん、そうだね、Tさんの文章にするためにはどうすればいいだろう？

J: 自分の経験を書くとか、自分の視点で書く…

T: 自分の視点で…。はい (笑)

H: ちょっといい? 一番最初の文章あるよね。これ、ほとんどの人は、で始まって。これを「わたし」で始めてごらん。ほとんどの人の意見はいらぬから、わたしの意見を書いてごらん。そしてそれをもとに書く。

T: …。

(5月11日 授業記録)

授業中における検討でも、Tは「中国では、家庭主婦はあまり評価されません」と、再び中国での家庭主婦に対する評価を根拠として自身の考えを述べているのだが、クラスメートにはその主張がなかなか伝わらない様子が見て取れるだろう。家庭主婦に対するイメージは人それぞれ異なる。Tだけにしかわからない家庭主婦に対するイメージを他者に伝えるには、ことばにして伝えるしかない。それも、具体的にことばにすることでしか相手には伝わらない。「中国では」といった一般的で抽象的なことばは、本人とかけ離れたところで使用されるため、それは外からの借り物のことばでしかない。どんなに借り物のことばを重ねても、相手には伝わらないのである。T個人が具体的に語ることでしか、対象を自分に引き付けることができないのである。

そこでOは、自分からかけ離れたところからしか対象を捉えることができないTを、T個人の問題として引き付けようと、「Tさんのそう考えるようになった理由や経験がわからない」という問いかけをする。すると、Tは少しずつ自身の経験を語りだす。さらに、そこでAから「なぜ家庭主婦なのか、なぜ女だけなのか」という主旨の指摘がされる。なるほど、Tの動機文では「積極的で、優れた家庭主婦は精彩的な人生を過ごすことができる」とあるが、なぜ家庭主婦だけがそうなのか、ここでの精彩的な人生を過ごすことと家庭主婦との間の必然性は何なのかがまだわからない。Aの指摘からも、Tが家庭主婦をそのように捉えるようになった思考プロセスが抜け落ちていることが分かる。T自身の価値観に迫るこの問いに対し、Tはまたしても戸惑いをみせている。そして、Oからの「Tさんにとって家庭主婦ってなに?」という問いに「わたしにとって家庭主婦とは・・・」とことばに詰ってしまう。ここでTは、今まで考えたことになかったことを考えさせられることで、自分の中にある既成の知識とことばでは対応しきれなくなっているのである。このようなときは、自ら思考し、自らことばを創り出さなければいけない。既成の知識の枠組みの中でしか思考することができなければ、再び抽象的なことばを重ねることしかできないからである。そこでCからの「自分の経験を書くとか、自分の視点で書く」やHからの『「わたしにとって」』で始めてごらん」という具体的なアドバイスを受けたことで、Tは何かをつかみかけたようだ。それは、次回提出されるレポートにも明らかである。

2. 4. 経験による意味づけ

「家庭主婦になりたいのか」と聞かれると、私はきつと「はい」とはっきり答える。なぜなら、家にとどまる感じがすきだからである。家事と育児に専念し、自分の努力を通じて、家族のために暖かい家庭雰囲気を作るのは、私にとって、理想的な生活である。

しかし、それを実現するのはなかなか難しい。なぜかという、まず、家庭主婦に対する社会偏見があるからである。中国では、家庭主婦ときたら、仕事をする能力がなく、他人に頼らねばならずとか、社会から取り残されるとかなどのように、マイナス的な評価ばかりである。こうした中、私はたとえ家庭主婦になりたくても、なる勇氣はほとんどないであろう。第二に、家庭主婦が従事するのが、一見では言うに値しない些細なことだが、実は色々な知恵と工夫が必要で、決して簡単にやることではないからである。私は主婦になってからもう四年以上になったが、家事の面となると驚くほど下手である。いくら実践しても、評判のいい料理も作れないし、きれいな家をきちんと整理できない。妻として、母として、嫁としてのそれぞれの役目に対して、どうやってうまくできるのか、毎日悩みに悩んでいて、無力感が徐々に増えてくる。もしかして、私は能力の弱い人であるか、それとも、主婦になる天分がないか、を自らに問い続けている。

だから、私にとって、家庭主婦になる道を選択する女性とは、勇氣だけでなく、能力も自信もたっぶりな持ち主である。このような女性たちは家庭主婦の分野においても、必ず自分なりの精彩を放つ人生に達すると思う。

(5月16日 BBS 提出レポート)

今回提出された動機文では、世の中の家庭主婦に対する評価に向けて、自分自身はそうではないと反対の立場を表明しているところは今までと変わらないのだが、そこで表明されるTの立場に、これまでのものと明らかに変容が見られる。すなわち、家庭主婦の対処する生活がいかに複雑なものであるかを、家庭主婦としての自己の経験を論じることによって表現し、それを根拠として、「だから、私にとって、家庭主婦になる道を選択する女性とは、(省略)自分なりの精彩を放つ人生に達すると思う。」との立場を表明しているのである。自分自身の経験を根拠としている分、対象を自分に引き付けて語ろうとしていることがわかる。

第三回目に提出された今回の動機文が、これまでのものとは違ってT自身の考えが強く反映されているものになったのはどうしてだろうか。それは前回の授業で展開された、他者との外的インターアクションがきっかけとなり、T自身の内側で内的インターアクションが展開された結果だと考える。前回の授業では、他者からの核心に迫る問いかけの連続に対し、Tは戸惑いを見せ、即答することができなかった。しかし、このことがきっかけとなり、Tは他者との外的インターアクションを受け止め、相手が言わんとすることは何なのだろうかと考えをめぐらせ、それを掴み取り、自身の思考と突き合わせて吟味した上で、思考を自らの力で再構築するに至ったのである。他者との外的インタ

ーアクションがきっかけとなり、自己との内的インターアクションが引き起こされたのだ。それは、前回の授業内検討での問いかけに対する答えが今回のレポートに書かれていることから見て取れるだろう。

しかし、今回提出された動機文では、Tの経験は分かりやすく書かれているのだが、そこからTが何を考えたのか、というTのものの見方や考え方は書かれていない。この場合、経験そのものが理由付けとなっている分、家庭主婦が「精彩を放つ人生」に達するという主張の論拠はまだ弱いといえるだろう。自己の経験それ自体は、本人のものの見方とは言えない。経験をしたという事実だけでは相手に伝わらないのだ。そこで何をどのように考えたのかという思考プロセスを、その事実から自分で引き出さなければいけないのである。そのため、今回の動機文をめぐっては、以下のようなやり取りが交わされた。

K: 前の文章より、Tさんが家庭主婦をどう思うのかが、はっきり出てきた。Tさんの顔が見えるようになった。Tさんの精彩のある人生とは。

T: 消極的に物事に当たるのではなく、積極的に生きる姿勢。

K: Tさんにとって精彩を放つ人生とは。

T: 私が一番言いたいことは、平凡な人生、ごく普通な人生の中に意義を見出すことがすばらしいということ。つまらないものの中に人生の本質がある。

(5月18日 授業記録)

この日の授業内検討でも、再び「Tさんにとって」という問いが他の参加者からされている。この問いに対してTは、戸惑いを見せることなくはっきりと「私が一番言いたいことは」と切り出している。それまでの、自己の主張を抽象的なことばによって理由付けしていた段階から抜け出し、対象を捉える自己の視点を認識し、さらにそのように捉える自分のものの見方・考え方を、具体的な経験から引き出し、言語化するという段階へ達している。

2. 5. ものの見方・考え方による意味づけ

(省略) 世の中には、家庭主婦に対して、「仕事をする能力がない」とか、「他人に頼らねばならない」などのような社会偏見が多少でもあるのだが、私自身の経験から見れば、立派な家庭主婦になるのは、決して口で言うほどそう簡単にはできるものではない。家庭主婦が従事するのが、一見では言うに値しないつまらないことだが、実は色々な知恵と能力が必要である。お金が多少にもかかわらず、いつも財務をうまく管理すること。美しくて、居心地がよい家を作るには、美学が分かること。子供を心身とも健康に育てるため、栄養学、心理学、教育学などが充分に分かること。たとえ社会進出しなくても、絶えずに自分の内心を充実させること。……。真面目に生活に立ち向かいさえすれば、極普通の日常生活の中に、実に

人生のすべての内容が含まれることは分かってくる。どうやってこの極普通の日常生活を気楽に送るのか、どうやって身の回りの細やかなことから人生の意義を掘り出すのか、これはおそらく家庭主婦一人一人の能力と知恵の限りであろう。

だから、私にとって、立派な家庭主婦とは、極平凡な生活を味わい深く、美しく過せる人生の達人である。私はこのような素晴らしい女性になりたい。

(5月25日 BBS 提出レポート)

上記は、5月25日に提出されたTの動機文の最終稿を一部抜粋したものである。前回の動機文では、自己の主張を裏付ける根拠として、経験だけが挙げられていたのに対し、今回は、経験から何を考えたのかという部分が根拠として挙げられていて、それが自己の主張の理由付けとなっている。経験そのものではなく、そこに映し出されるT自身のものの見方・考え方を自分で引き出し、それを記述している分、今までの動機文と違って論理的かつオリジナルな文章になっていることがいえる。

確かに、人生の達人を家庭主婦だけに限定している点では、Tの文章には再考の余地が十分に残されている。しかし、これまでのプロセスを見れば、Tは「自分の問題として捉える」ことのスタートラインには立ち、前進していることがわかるであろう。Tは、他者とのインターアクションを通して、自己の思考を明確にし、それをことばにしていたのだ。

3. 結論

以上、Tの動機文執筆における「自分の問題として捉える」までのプロセスを、4回にわたって提出された動機文の変遷と授業記録、及びBBSでのやり取りを資料に縦断的に観察・分析した。

分析の結果、Tは「自己の視点の認識→経験(事実)による意味づけ→自分のものの見方・考え方による意味づけ」というプロセスを経て、自分の考えていることを明確にしていたことが分かった。Tは最初の段階で、既に「私にとって家庭主婦は尊敬に値するものだ」という主張は打ち出しており、この主張は動機文の最終稿まで貫き通された。しかし、初期の段階では、家庭主婦という対象を捉える自己の視点は認識していたものの、それをそのように捉える自己の思考プロセスを把握し、言語化することはできておらず、外側の情報によって主張を理由付けていた。そして、それでは自分の主張が他者に伝わらないと告げられ、次にその主張を自己の経験で意味づけることをする。そして最後に、その経験から自分が考えたことを引き出し、それを根拠として自己の主張を打ち出した。その結果、Tの文章は第一回目に提出されたものと比して、論理的かつオリジナルな文章へと変容した。

Tの活動初期の段階でのやり取りを見ると、自分の主張がなかなか相手に伝わらない

様子が伺える。「私にとって〇〇は××である」という主張だけでは、インターアクションは成立しない。確かにこれも、ある対象について自分がどのような価値を置くのか、という個人のものの方の見方・考え方を示しているとはいえる。だが、どのような価値をどのように置くのかという自己の思考プロセスを記述しなければ、それも自分のことばで記述しなければ、相手には届かないのである。

ここに、自分の考えていることを明確にすることの意義を、すなわち、「自分の問題として捉える」ことの意義を見出すことができると私は考える。インターアクションとは、ことばによる自己と他者との関係付けであると述べた。結局、「自分の問題として捉える」ことをせずに、再び抽象的なことばを重ねるだけでは、互いの主張に差異を見つけることもできなければ、そこに接点を見出すこともできず、両者の関係は平行線を辿るだけだろう。結果、インターアクションは成立せず、相手との関係を構築することはできないことになる。

だがその一方で、「自分の問題として捉える」ためには、「自分の問題として捉える」ことができていないことを認識できなければならない。自分の考えが相手に伝わるのか、伝わらないのか、それは実際にことばにして相手に伝えてみなければ分からないことである。インターアクションによって、相手に伝わらないことを認識して初めて、「自分の問題として捉える」ことの重要性を実感するのだ。

繰り返しになるが、「自分の問題として捉える」ことができなければ、インターアクションは成立しないし、「自分の問題として捉える」ためには、インターアクションを取ることはできないのである。Tのプロセスからは、インターアクションを通じて「自分の問題として捉える」ことの意義を読み取ることができるだろう。そして、この「自分の問題として捉える」ことへと向かわせる一連のインターアクションの連鎖と個人の思考する力によって、冒頭で述べたような集団間での固定化した対立関係に根ざした、個人レベルでの衝突や摩擦の本質化を回避することができるのではないだろうか。対立の固定化を解きほぐることができるのは、認識し思考する個人がインターアクションへと向かい、思考を重ねることである。

4. おわりに

以上、Tの動機文執筆過程における「自分の問題として捉える」までのプロセスを分析してきたわけだが、「総合」という活動は、動機・対話・結論・相互自己評価までを含めての活動である。よって今回の報告では、活動の断片における分析しかすることができなかった。今後は、対話から相互自己評価までを含めて、活動全体を通してTの産出レポートや授業内でのやり取りを丁寧に分析していく必要がある。活動が終わった後も、継続して分析を続けて行きたいと考えている。

(ヤマモト レイ 修士課程1年)